



冬空の
フューネラル

poripeimosu

「いつ死ぬかも分かんないのに、葬式のことなんか考えるだけ時間の無駄よ。だいたい葬式って、何」

ハルコはそう言って、僕の開いていた葬儀場のパンフレットを鼻息で飛ばした。

「いつ死ぬか分かんないから、今のうちに考えとくんだろ」

呆れて言うと、ハルコはハハハと乾いた笑い声を上げて、冷めてしまったレモネードを一息で飲み干した。彼女はいつもそうだ。こんな風に、あらゆる問題を先延ばしにする癖がある。そうしてギリギリまで手をつけないものだから、締め切りがあったりすると案の定毎日が徹夜潰けになり、訳の分からないドリンク剤ばかり流し込む生活が始まったりするのだ。その度、僕は「それ見たことか」とやきもきさせられる。しかし彼女は焦らない。そんなもの、これまで一度も感じたことがないかのように、いつものりりくらしと生きている――ように見える。

「君は、刹那的すぎるよ」

「セツナテキって」

ハルコは口元を親指の腹で拭いながら、子供の無邪気さに目を細めるときのように柔らかく笑った。

「君を見ていると、僕の方がそわそわしてくる」馬鹿にされたような気になって、ついムキになる。

「そんなこと言って」台所へ立とうとしていたハルコだったが、突然方向を変えて、空のカップを持ったまま僕の膝に跨って続けた。「あなたはそういうあたしが好きなくせに」

そして彼女は唐突に甘ったるい接吻を僕に与えた。執拗なその繰り返しに、僕はまた、彼女が何枚も上手であることを認めることになる。

唇が離れる僅かな隙に呼吸をすると、鼻からレモンの香りがすうすうと抜けていった。まるで身体の軟なところを、彼女の舌で器用に舐め上げられるような快樂が僕を満たした。

昼を過ぎ、部屋に入り込むようになった冬の低い日光が、足先を照らし始めている。かじかんでいた爪先の緊張が解れるのと同じ速度で、僕らは忙しさにかまけて作ってしまった距離を、いつもこうしてぐずぐずになって埋めることに日曜日を費やすのだ。

そんな光景を、つい昨日のこのように感じる。

もうどれくらいの時間が経ったのだろうか。僕は、ハルコの亡骸の前で正座をしたまま、ぼんやりと記憶の断片をなぞり続けていた。

ハルコの死は突然で、あまりにも呆気なかった。日頃の無理がたたったのか、急性の心筋梗塞であつという間に死んだ。あれほどドッグにかかれと言っていたのに、先延ばしにするからこういうことになるんだ。今更言っても仕方のないことを、もう何度繰り返し思っただろうか。

足に意識を移し、これでは立ち上がる時に苦勞するだろうなと不意に思う。いや、こんなときに、こんな場所で一体何を考えているのか。軽く頭を振り、再びハルコの顔を上目を見た。鬱血が進んできている。黒みがかった血に染まった顔は、赤紫色に変色し始めている。そのどこにも、生前の余裕は見つけない。だが代わりに、焦りもやはりなかった。

「こんなときくらい焦れよ」

たまらなくなつて、そばの鏡台からハルコの数少ない化粧道具を取り出し、使い方もよく分か

らないまま不器用に死に化粧を施し始めた。

「だから言っただろ。生きてる間に決めとかないと、こういうとき残された方は困るんだよ」

どきりとするほど声が響いて、思わず周囲を見渡してしまう。見慣れた家具はいつもと変わりがなくしんとして、あるべき場所におさまっているというのに、声だけがぼわぼわと響いている。

苛立ちだか悲しみだか判然としないものに心が波立ち、僕は突然内側から激しく揺さぶられ始めた。まるで突風の中に突き飛ばされたみたいだ。自分ではどうすることもできない揺らぎに捕まり、自分の真ん中が空洞になっていることに気づかされる。湧き上がる恐怖に、思わず情けない声が次々に漏れた。軟なところから干からびていき、ひびが全身を走り抜ける。そうして割れた身体から何かとてつもなく大切なものが流れ出ていく感覚に襲われている。かき集めようと両手を動かしても、空を切るばかりでまるで実感を伴わない。身体はあり、血もあり、内臓だってこの通り、骨の内側におさまっている。では僕は、一体何を失ったんだ？ ハルコが去って、僕から何が失われたっていうんだ！ 立ち上がりかけて、だが足の痺れに自由を奪われその場に崩れ落ちた。ハルコの顔が眼前に飛び込んでくる。ひどく皮の剥けた唇には、どう見てももう魂がなかった。

いつでも自由なハルコを羨んでいた。羨みながら憎み、憎みながら優越感や正義感に浸り、僕は彼女を頭がおかしくなるんじゃないかと思うほど愛した。そして彼女もそれに応えてくれた。自分で言うのも何だけれど、僕らはこれ以上とない、いいパートナーだったと思う。しかし、彼女はもう僕を必要とすることも、僕を抱きしめることもない。ハルコは命を失い、僕の前から居なくなってしまったのだ。それが死だ。それが、人が死ぬということだ。何も驚いたり狼狽したりするようなことじゃない。

でも、見てくれ、ハルコ。僕はこの通り、感情さえ選べないでいるんだ。怒るべきなのか泣くべきなのか叫ぶべきなのか笑うべきなのか、黙って、君がいつも僕にしてくれたように優しくすべきなのか、僕はこの顔に身体に指先に、一体どの感情を乗せて動かすべきなのか、まるで分からない。

僕は、君との、別れ方が、分からない。

「ねえ、ハルコ。君なら、どうする？」

ほとんど無意識に言葉が漏れた。期待など、もちろんなかった。しかし僕は眼前のハルコの長い睫毛を見つめ続けた。それは当然ぴくりとも震えなかったが、飽きずに見つめ続けていると浮腫みを帯びてきたその顔が突然、今にも「いいから適当に、ちゃちゃっと済ませちゃってよ」と言いだしそうに見える瞬間があった。

「……ちゃちゃとって。そりゃどうということだよ。何で君はいつもそう適当なんだ」

——いいじゃない、適当で。どうせ考えたって分かんないんだから。深刻になるだけマヌケよ。

「まあ、確かに、その通りかもしれない。本当にすべきだったのは、自分の葬式の準備なんかじゃなかったんだな。いつだって君が正しいんだ」

——そうよ、よろしい。分かればいいのよ、分かれば。それよりあなたはいつも、考えすぎなんだってば。

まだ鮮明な声の記憶が耳の奥で響く。少しかすれ気味の、甘い声だ。

僕は不意に、視界に入りこんできたハルコの買い置きドリンク剤を二本掴み取り、ほとんど息継ぎもせず飲み干した。それからそばの化粧道具を掴み上げ、それを思い切り障子に向かって放り投げた。小気味よく破れる音がして、そこから冬の柔らかい日差しが差し込み、畳に敷いた布団の中に静かにおさまっているハルコの顔に、真っ直ぐ降り注いだ。中途半端に化粧された赤い顔は、光を受けると過去最高に滑稽なものになった。これはひどい。僕は堪え切れず、とうとう嘔き出した。

「あーあ、こんなにおかしいのに、笑えないなんて残念だな」

僕は笑いながらハルコの布団を剥がし、いつものパジャマを着た彼女の身体を強く抱きかかえて立ち上がった。もう痺れは去り、僕は二本の足の裏でしっかりと地面を捉え、彼女を抱いた。ずしりとした重みが腕に乗っている。身体だけ、置いていくなよ、全く君は。僕は止まない笑いをひき連れたまま、ハルコと一緒にベランダに出た。冬の青空は透き通っていて、これなら彼女も迷わず天国へ行けるだろうと、身勝手に、能天気にも思ってみる。

「最後まで、君の言うことを支持してみるよ」

彼女が青空をよく見えるようにしながら、耳元でそう囁いてみた。

——分かればいいのよ、分かれば。葬式なんて辛気臭いもん絶対やめてよね。みんなそれぞれ、別れたいときに勝手に手を振ってくれればいいんだって。

ハルコの声がまた頭の中に下りてくる。気づけば僕の身体の軟なところは温かいもので満たされ、ひび割れを通過して全身に回っていった。(了)